

(2) 読書

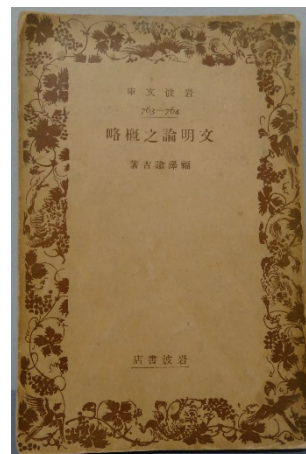
助手時代、丸山は戒能通孝、磯田進、辻清明、寺田熊雄と明治維新史や日本経済史に関する研究会を行い、土屋喬雄『日本経済史』などを読んだ。また、学生時代に引きつづきマルクスの著作に取り組んだほか、ヘーゲル『精神現象学』、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、ボルケナウ『封建的世界像から市民的世界像へ』、大塚久雄『株式会社発生史論』『欧州経済史序説』などを読んだ。儒学や国学にとどまらないこのような読書によって、村岡典嗣から「我々の常識からすると奇妙」だと評されたユニークな助手論文が生み出されたのである。

一方、丸山の実存を強く揺さぶったのがドストエフスキーである。大学卒業前後に読んだ『悪霊』によって、ソビエトの学問に幻滅しつつも抱いていた社会主義に対する信念はうち砕かれ、夜も眠れないほどのショックを受けたという。

私の社会主義への素朴な漠然とした 帰依 みたいなものが、あそこにでてくるピョートル・ヴェルホエンスキーですか、ああいう革命家のタイプとか、無神論のゆきつく果てとかをつきつけられて、ガラガラと崩れるような感じがしました。いかなる反マルクス主義の書物からもこれほど大きな打撃は受けませんでした。いまでもそのショックから立ち直れないのかもしれない。(古在由重・丸山眞男「一哲学徒の苦難の道」)

もう一人、この時期の丸山の関心を引きつけたのが福沢諭吉であった（画像：福沢諭吉『文明論之概略』〈丸山文庫登録番号 0199072〉）。

福沢を読みはじめると、猛烈に面白くてたまらない。面白いというより、痛快々々という感じです。そういう感じは今からはほとんど想像できないくらいです。とくに『学問のすゝめ』



と、この『文明論之概略』は、一行一行がまさに私の生きている時代への痛烈な批判のように読めて、痛快の連続でした。（丸山眞男『「文明論之概略」を読む』）

やがて丸山は荻生徂徠と並んで福沢の研究にのめりこみ、ライフワークとするようになる。徂徠と福沢を思想史研究の出発点に据えたことは、「近代」を再評価していく丸山の関心の所在を端的に示している。